



生みの親といっしょに
よりよい育ての親に

わたしを ぎゅっとして
わたしを 見つめて
わたしを 聞いて
わたしを 呼んで

『子どもは自分で「育つものか？ 育てるものか？」』

法人だより5月号、遅れて本当にすみません。
今私は、「保育通信」4月号、5月号で、ある京都大学名誉教授と
論争を展開しています。

始まりは「保育通信」3月号の中で
「なぜ今、子どもは学校で学ばなければならないのか？」
という広報部の問いに、教授の
「子どもは未来の大人だからでしょう」という回答に私はちょっと違和感を持ったからです。

そこで私は、社会福祉法人 童心会の保育理念を持って反論しました。
「子どもの学ぶ心」というのは、子どもたちが毎日毎日の生活を通して
イキイキ、ワクワク、ハラハラ、ドキドキを感じながら
生きている喜びや楽しみを身につけるためにくり返し、
「人間としての生きる姿勢」を学びながら育ち、
そして育てながら学び続け 成長していくのではないのでしょうか？、と
私見を述べさせて頂きました。

そして私たちが臨床保育の現場で子どもたちに教えられた「生きる姿勢」とは
興味・関心・好奇心・意欲・意志であると伝えました。

「子どもの学ぶ心」とは「0才児からの愛された育ち」と生理的欲求とが満たされて
子どもは社会的関係性の中で育つものであると確信しています。



笑ったかず一番 だっこされたかず一番 やさしくされたかず一番
遊んだかず一番 でかけたかず一番 チャレンジしたかず一番



E-mail doushinkai@kashiwa-sakasai.ed.jp URL <http://www.kashiwa-sakasai.ed.jp>

TEL 04-7172-3939 FAX 04-7172-3901

社会福祉法人 童心会

〒277-0042 千葉県柏市逆井1377番地1
理事長 中山 勲

子どもの日々の実態を臨床保育の現場で見た時に、
現在 脳科学でも言われている
ミラーリング、ミラーニューロンという言葉で立証されています。

しかし、先生はまだ子どもは親が「育てる」もの、
親に「育てられる」もの という捉え方をしています。
また「教える—学ぶ」という考え方も、
学ぶとは先生が「教える」もの、
先生に「教えられる」ものと考えておられるようです。

社会福祉法人 童心会の保育は
子どもは「教えなくとも、自ら学ぶ」という人間観の上に立っています。
だから子どもは「育つ」もの 「育ちあうもの」。
子どもは「学ぶ」もの 「学びあうもの」と考えています。

さて、皆さんのお考えを教えてください！

最後に先生は今回の質問者(柏さかさい保育園の園長 中山勲)の誤解と称して、
「教えなくとも、子どもは自ら学ぶ」というご自分の考えから、
私の議論の展開に疑問を持たれたように思います、と書かれていました。

私は、最近の脳科学の進化には 目を見張るものがあると驚いている者の一人です。
社会福祉法人 童心会の私たちには、私たちの保育を裏づけてくれる新しい科学です。

皆様もご一緒に考えてみて下さい！

中山 勲 論

- 子どもは「育つ」「育ちあうもの」
- 子どもは「学ぶ」「学びあうもの」

名誉教授 論

- 親が「育てる」「育てられるもの」
- 学ぶとは「教える」「教えられるもの」

平成 28 年 5 月 吉日
社会福祉法人 童心会
理事長 中山 勲